# 入院中の子どもの教育

## 特集にあたって

栗山宣夫

当事者を対象としたアンケート調査や当事者の語りなどにより，入院中の子どもの教育的ニーズに応えていくことの重要性が示されているが，その実現のためには「入院中の保育・教育機会の保障」「子どもの心理をふまえた支援の内容・方法の充実」が必要である．

「入院中の保育・教育機会の保障」という点では，義務教育段階と比べると高校生については極めて遅れているといわざるを得ない現状がある．病院内学級高等部の少なさ，学籍異動ができない(年度途中の復学ができない)，単位認定や教科の専門性確保等の課題が山積している．本特集ではこの制度的な問題についてその全体像を栗山が論じ，この課題克服に向けて具体的な工夫を行っている病院・学校の実践について寺田が報告した．

また，「子どもの心理をふまえた支援の内容・方法の充実」に向けて，谷口論文では学習支援に留まらない教師による心の支援のあり方について，入院中の子どものストレスの種類・特性とも照らし合わせながら論じている．さらに副島論文では，この心の支援に応え得る病院内学級担当教師の専門性について論じている．

医療技術の進歩により小児がんの中で最も多い小児白血病の治療成績は急速に向上し，現在では長期生存率が約75％となっている．命が助かるケースが増えてきたことは何よりであるが，その治療は長期にわたり入退院を繰り返す（1回あたりの入院期間の短縮化）など，通常学校との連携・協力の重要性は一層高まってきている．

また，がん患者全体において小児がんの患児は比較的少数（年間2,000人～2,500人）であり，小児がんの特性から治療する病院の集約化が進められているという事情のために，自宅から遠く離れた小児がん拠点病院・連携病院への入院を余儀なくされるケースが多い．

地元の学校と切り離された状態を回避する手段として，ICT機器の活用による遠隔授業が注目され始めている．コロナ禍前より病弱教育の領域ではその必要性を訴えていたが，なかなか進まなかった．それに対して，コロナ禍において遠隔授業への社会認識に変化が生じた．しかし，ICT機器で通常学級と繋げば教育支援として十分というものでは決してない．それらは谷口論文や副島論文でも明らかである．篠原は，ICTを使用して通常学級と回線を繋げるだけではない，教育的なニーズと繋げるコーディネーターとしての役割について，実践事例を通して示している．

小児がんの発症年齢として最も多いのは就学前である．病棟保育士の導入が進み始めているが，養成課程は十分ではなく，病棟保育士の専門性とは何か，その役割とは何かを検討する必要がある．林はそれについて病棟保育士としての経験もふまえて示している．

最後に，国際動向として北欧諸国の取り組みについて，高橋が実際の訪問調査を通して紹介している．今後の日本の取り組みを考える際に，海外の動向を理解することは重要である．

入院中の子どもの教育機会の保障と質の充実を進めるために本特集が役立つことを切に願う．

（くりやま　のぶお　育成短期大学）